

台湾の美談の行方

——ある日本人教師の碑をめぐる——

伊藤 龍平

はじめに

説話研究における美談は、例えば、重信幸彦による魅力的な仕事があるにもかかわらず、^{〔1〕}いまだ充分に認知されてはいないようだ。その理由を斟酌するに、日本の説話史に美談を位置づけたとき、所詮は近代に生まれて消えた鬼子的存在と目されているからだと察せられる。

しかしながら、美談を自己犠牲の精神にもとづく、人間の有り得べき生のかたちを説く物語と定義づけるならば、あまたの説話のジャンル中に事例を見いだせる。たとえ近代を美談全盛の時代と位置づけるにせよ、近代以前の説話——例えば、仏教説話の高僧伝や儒教説話の孝子譚、キリスト教説話の聖人伝などに描かれる理想的な人間の生き方を、美談の範疇に含めることも不可能ではない。また、近代以降を生きるわれわれの身の回りにも、美談という言葉は生きて使われている。

今後の美談研究の可能性は、美談をことさらに近代という枠に押し込めずに、さらにいえば、日本という枠にも押し込めずに、大所高所から捉えなおす点にあるだろう。

また、美談を理想的な人の生のありかたを説いた話と定義づけるとして、それではそれが誰にとって理想的なのか、という問題も重要である。この問いに対する答えは、近代という時代を想定するとき、一見明瞭に見える。すなわち国民国家が形成されていく過程で、為政者が「国民」を創るために提供したのが美談なのだ、と。つまりは、権力者が国民となるべき人々の前に美談を用意したのだとする見解である。確かに、重信が提示した、戦時下に広められた美談（軍国美談、銃後美談など）については、この図式で概ね見通しが立つ。

しかし、この答えは美談が美談であるための必要条件を満たしていても、十分条件を満たしてはいない。権力者が美談を創る、或いは利用する例が多いのは諾えるとして、それでは、権力なきところに美談は生成しないのか、という問題が発生する

からである。近代美談の生成過程において、権力者の果たした役割は少なくないが、その点のみを強調するのは、美談というジャンルが抱え込む問題系を矮小化するだけだろう。

本稿で取り上げるのは、日本統治時代の台湾で亡くなった、ある教員をめぐる美談である。

山岡栄（一九〇二―三〇）というその人物は、大雨で増水した川の中洲に取り残された台湾人の子どもを救おうとして川に飛び込み、命を落とした。山岡栄の話は、日本統治下の台湾で美談として喧伝されたが、その後、国民党が台湾を統治するようになってから語られなくなり、やがて民主化時代を迎えるに至って復活した。

本稿では近現代の台湾を例に、山岡栄の話が歩んだ道を通り、美談という説話ジャンルの性質について考えてみる。重信には「美談の「ゆくえ」という論考があるが、本稿の題はそれに倣って「台湾の美談の行方」とした。頭に「台湾の」という三語を冠しただけだが、そのことによって見えてくる風景はよほど異なったものになるはずである。

一、昭和五年、台中州東勢郡新社庄の水害

昭和五年（一九三〇）五月九日の台湾中部は梅雨前線の影響で集中豪雨に見舞われ、各地に大きな被害をもたらした。山岡栄の事故の一報を奉じたのは五月十一日付の『臺灣日日新報』

で、「生徒を救はんとして／教員急流のため溺死／危険だった六名の生徒と父二名は減水のため漸く助かる」「山岡君の死は全く教育界の美談／小野訓導の殉職に比すべきもの／玉手教育課長談」「故山岡教諭の假葬儀執行／臺中の中尊寺で」等々の見出しを掲げ、大きく紙面を割いて報じている。また、翌五月十二日付の『臺灣日日新報』漢文版でも「山岡君之死斯界美談／玉手課長談」との見出しで報じているので、台湾人の中高年層の日本語未習得者にも事件は伝えられていた。

ここで「山岡君の死は全く教育界の美談」（日文版）、「山岡君之死斯界美談」（漢文版）と、事件報道の初期から「美談」の語が用いられていることには留意しておきたい。

五月十四日付『臺灣日日新報』にも「哀れ尊き犠牲／山岡教諭に恩命／生徒父兄を救助せんとし洪水の爲め遂に死す」と続報が載せられ、さらに五月十九日付『臺灣日日新報』でも、山岡栄の顔写真と台湾に駆け付けた栄の父親と校葬の様子を写真を載せ、「悲しみ新たな山岡栄氏の校葬／啜り泣きの聲の中に十七日しめやかに執行」「霊を慰めるため遭難碑を建立」「父君語る」と報じている。一方、地方紙である五月十五日付『臺南新報』でも「公學校生徒八名を救はむとして身を殺した東勢國民學校助教諭の美拳」と報じている。

このように、台湾内では大きく報じられた同事件も、日本内地においては、全国紙で報じられた形跡はない。管見に入った限りでは、山岡栄の地元・愛媛県の地方紙『伊豫新報』昭和五

年五月十五日付で「教へ子を救ひ教師が溺死／臺中國民學校に
ゐた山岡榮氏／中山町の父親が急行」との見出しで報じられた
のが唯一の例だが、僅か二段の小さな記事である。

一方、「臺灣教育」三三五号（昭和五年）では早速特集が組
まれている。寄稿者は多いが、なかでも石塚英蔵（台湾教育会
総裁）、杉本良（台湾総督府文教局長）、水越幸一（台中州知事）
といった錚々の名が目を書く。

二〇〇七年四月から五月にかけて、現地である東勢鎮・新社
郷を訪れた私は、土地の古老から次のようなお話を伺った。話
者は邱國源さん（一九二六年、東勢鎮生）、傅茂金さん（一九二六
年、東勢鎮生）、陳潭さん（一九二九年、東勢鎮生）の三人で
ある。⁽²⁾

邱「放課後のときに、ちょうど夕立が来た。そしてあの子
どもが……橋通らないとね、うち帰れないんだ。あの先
生が連れて帰って、溺れて……」

——溺れて、どうなったんですか——

邱「死んだよ」

陳「子どもたちのね、帰るアレをね、保護する。溺れかかっ
た子どもを助けようとして流された」

傅「溺れかかった子どもを助けるために、自分を犠牲にし
て」

（中略）

——いつ頃のお話でしょうか？——

傅「昭和……昭和時代だな」

陳「昭和十四、五年あたりだな」

傅「そう」

——このお話はみなさん知っていますか——

傅「知ってる。学校の先生がよく言う」

——学校の先生が？ 公学校の話？——

傅「つまり美談だな。ひとつの美談」

ここでも期せずして話者が「美談」という語を使っている点
に留意したい。話者の一人が事件を「昭和十四、五年あたり」の
出来事と話しているのは記憶違いだが、それなりに理由があっ
た。昭和十五年（一九四〇）に山岡榮十周忌の記念式典が大々
的に催されているのである。⁽³⁾

話者の発言に「学校の先生がよく言う」とあるように、山岡
榮の美談は当地では学校行事化していた。先ほど紹介した話者
は三人とも新社公学校ではなく、東勢公学校の卒業だが、この
地域の学校ではどこでも行なっていた（「公学校」は台湾人子
弟向けの初等教育機関。日本人子弟向けの「小学校」と区別さ
れる）。では、具体的にどのような行事が行なわれていたのか。
陳潭さん（前記）と張秋貴さん（一九三二年、東勢鎮生）の証
言を紹介する。⁽⁴⁾

張「ほとんど、あのとき、毎年のように行っているよ。毎年、あの時期になったら、こつちから学生行くでしょ？ 歩いて行くでしょ？ 先生が何名か連れて」

陳「代表としてね」

張「あるはずだ。忘れたかもしらんけどね。あるよ、毎年ね。あの時期に着いたら、校長先生がね、朝会で話したあと、今度、先生ね、どの教室に行っても、再びこういうこと言うんだよ。これがひとつの社会的な教育だから」

同じく、劉吉平さん（一九二八年、新社郷生）、頼運和さん（一九二八年、東勢鎮生）からは次のようなお話を伺った。劉さんは事件のあった新社の出身で、少年時代に式典に参加している。一方、頼さんは、後で述べるように、山岡栄の美談復活のキーパーソンになった人物である。⁽⁵⁾

劉「昔、国民学校時代は毎年五月九日にね、東勢郡役所の……東勢郡というのがあるでしょ？……東勢郡役所主催の、何ちゆうかなあ、まあ、追悼式みたいなものがね、あるんですよ。あのときに群衆が来るんですよ。そして、あそこ場所がね、狭いもんだから農学校の生徒、国民学校の生徒は、ただ六年生、六年生と農学校の生徒が……」

——何をやったんですか？——

劉「記念碑の前でちよつと……」

頼「花を捧げたりしてね、お線香をあげたり、山岡先生の面影を偲びながら……」

劉「そうそう、大体そんなもんだな」

生年から推察するに、劉さんが参加したのは昭和十五年の十周忌記念式典である可能性が高い。だとすれば、この式典に出席していた山岡栄夫人にも、劉さんは顔を合わせていたはずである。ただ、劉さんの記憶には残っていなかったが。

二、「美談」生成の背景

それでは、山岡栄とはどのような人物だったのか。次に『中山町誌』から引用する。⁽⁶⁾

氏は明治三五年（1902）十月二三日中山町大字出淵にうまれた。伊予実学校卒業後は中山青年団の指導、農業改良等に力を尽くし、やがて伊予郡れんごう青年団長となつてますます生年指導に尽力した。もちろん徳望手腕共に高く、特に選ばれて昭和御大典には地方施饌に招かれ記念章を賜った。

昭和五年四月大志を抱いて台湾に渡り、農林国民学校に奉仕し子弟の教導に専心した。教育愛に燃え一人一人の生

徒に熱情を傾け指導に当たった氏の薫化は、日浅いにも拘らず父兄の信望子弟の敬慕を一身に集めていた。

右の記事には誤りがあり、山岡栄が台湾に渡ったのは事故の前年の昭和四年暮れである。渡台後、半年足らずで事故に遭ったということになる。この後、「五月九日朝来の豪雨で」云々と事件の顛末が記されたのち、次のように続けられる。

この壮烈な行動は鬼神も泣かしめるものがあつた。この教育精神に燃えた行動と責任感の強いことは誠に教育者の鑑であつて、悲報が伝わりと台湾島民挙げてこの壮烈な死を悼んだといわれる。台湾教育会総裁より表彰状を贈られ、校葬の榮に浴した。

山岡栄のご息女は皆ご健在である。そこで愛媛県伊予市中山町在住の長女・山岡町子さん（一九二五年生）、三女・亀岡洵子さん（一九三〇年生）のもとを訪問し、お話を伺つた。

豪農である山岡家は地方の名士で、お話を伺うかぎり、恵まれた少年時代を送つたらしい。長じて後は、尺八を趣味とし、自宅に茶室を作るなど、文化人としての面目を躍如とさせる逸話が伝わっている。本業のほうでも、当時はまだ珍しかったトマトの栽培に乗り出すなど、進取の気性に富み、長男であるのにブラジルへの移民を志すといった、開拓精神も持ち合わせて

いた。その一方で、日本に残してきた妻子にバイナツプルを贈るなどの心配りも忘れなかつた。

没後は『中山町誌』にも記されているように、昭和十年（一九三五）には、伊予郡れんごう青年団、中山青年団の尽力で、地元の盛景寺内にも殉職記念碑が建てられた。記念式典は学校で行なわれ、当時小学四年生の町子さんが式辞を呼んだという。美談化は日本内地においても進んでいた。

現実に一人の人間が亡くなっている以上、不謹慎な表現になるかもしれないが、生徒を救おうとして川に飛び込み、命を落とすというのは、美談の話型の一つとして認められる。『中山町誌』の文章に「この壮烈な行動は鬼神も泣かしめ」云々とあるのも定型表現だが、山岡栄の事故の前後、各地で殉職教師の美談が語られていた。

先に紹介した『臺灣日日新報』の見出しに「小野訓導の殉職に比すべきもの」とあつたが、この小野訓導こそ、殉職教師の美談の典型と呼ぶべき存在だつた。宮城県刈田郡宮尋常高等小学校の訓導だつた小野さつき（当時二十一歳）が、溺れる生徒を助けるために川に飛び込み、命を落としたのは大正十一年（一九二二）七月七日。うら若き女性教員の死は人々の同情を惹き、大正十一年中に、中田武雄『烈婦小野訓導』（私家版）、佐藤武『小野訓導の死と其の前後』（私家版）、日下慶太郎『噫故小野訓導』（刈田郡教育会）といった本が刊行されているほか、斎藤子郊作詞、山田耕作作曲の唱歌「小野訓導の歌」が作

られている。この美談は台湾教育界にも波紋を及ぼし『臺灣教育』二三四号（大正十一年）に「小野訓導の殉職より得たる教訓」という記事が載せられ、義援金の募集を呼びかけている。

こうした動きに触発されたのか、大正十二年には、田淵巖『教育美談 噫殉職の十訓導』（日比書院）という本が出版されている。同書には殉職した十人の教師の逸話が載せられているが、その筆頭に掲げられたのが小野訓導であった。また、救助のために川に飛び込んで亡くなった教師の例として、第二章には松本英雄訓導の話（東京府町田市・玉川上水）が、第六章には三浦某訓導の話（岐阜県加茂郡下麻生町・飛驒川）が載せられている。

これらの美談の主人公像は奇妙なほど似ている。美談においては、一回性の行為が普遍化され、その行為から遡って主人公の人となり語られる。何よりも、美談とは「行為」そのものなだった。この点については、別途、考察の必要がある。

ともかくも、山岡栄の行為は殉職教師の美談の系譜に加えられたのである。

問題を敷衍させれば、近代には職業別の美談も好まれていた。管見に入った例を挙げると、『通信職員善行美談』（内山小夜吉、東學社、昭和十四年）、『消防職員善行美談』（吉田豊巳、東學社、昭和十四年）等々。ここで対象とされているのは、公僕であることを強いられる公務員たちである。教員の美談もこの系譜に含めることができよう。

また、近代美談のなかには災害美談の系譜もある。緊急時においても冷静に行動し、自己を犠牲にして他者を救った人々の物語である。平時ではなく、有事の美談という意味では、軍国美談（銃後美談を含む）とも通ずるものである。災害美談は単独で語られるより、美談「集」として編まれることのほうが多かった。例えば、『台風水害遭難學童美談』（大阪府学務課、昭和九年、宝文館）、『關西大風水害 岡山を中心の美談と悲話』（坂井延治郎、昭和九年、新時代社）などの例である。

台湾においても、災害美談は生成していた。時代は少し下るが、昭和十年の台湾大地震の際に、君が代を歌いながら亡くなった詹徳坤少年をめぐる「君が代少年」の話がある⁽⁸⁾。同話も『臺灣教育』（昭和十年）の初出の際には、「震災美談」という見出しで列挙された美談集のなかの一話だった。山岡栄の話も、災害美談の系譜に連ねることができよう。

さて、山岡栄の美談について考えるうえで、忘れてはならないことが一つある。事故のあった昭和五年の台中では、台湾近代史のみならず日本近代史に残る大事件があった。植民地下台湾最大の抗日武装蜂起・霧社事件である。

先住民タイヤル族の起こした霧社事件について詳述する余裕はないが、事件というよりも、台湾で戦争が起こったと捉えたほうが事実に近い。霧社公学校の襲撃に始まる叛乱は翌年の五月まで続き、七〇〇名に及ぶタイヤル族の人が死亡した。そして霧社事件が起きた際の台中州知事が、山岡栄の碑を建立し、

『臺灣教育』三三五号（前記）の追悼特集にも寄稿している水越幸一なのである。なお、水越は事件の鎮圧に当たったのち引責辞任している。

山岡栄の話は、平時ではなく有事下の美談であった。昭和五年は日中戦争が始まった年でもあるが、台湾住民にとって、当面の問題は霧社事件のほうである。植民地の美談について考えるには、外地のおかれた個々の状況に目配りをする必要がある。

三、「地方化」される美談

近代以降、美談が語られた有力な場が学校だった。教科書をメディアとし、教員を語り手、生徒を聞き手として、美談は全国津々浦々に広まっていったのである。

事態は近代日本を支えた植民地においても同じである。自己犠牲の物語という定義にもとづいて、公学校の国語教科書に載る美談を列挙してみると、大正十二年（一九二二）刊行の第三期『齋國語讀本』に、「水兵の母」「廣瀬中佐」「空の勇士」「楠公父子」「忠犬ぼち」「震災美談」「呉鳳」が載り、昭和十二年刊行の第四期『齋國語讀本』に「西住大尉」「小さい傳令使」「廣瀬中佐」「空の奮戦」「杉本中佐」「呉鳳」「芝山巖」が載る。活字化されてはいないとはいえ、山岡栄の美談は、これらの美談群とともに台湾の学校空間の中にあった。

しかし、「日本人」というアイデンティティを後発的に与え

られた台湾人の児童が聞く美談が、内地のそれと同じであったよいはずがない。先に挙げた美談のなかで、本島人（台湾人）が主人公の話は「呉鳳」のみで、あとはすべて内地人（日本人）が主人公の話である（「芝山巖」は、話の舞台は台湾だが、主人公は日本人）。先に挙げたのは、同時代の説話に限定したが、実際には、楠正成父子の話のような歴史時代が舞台の美談もある。これらは外地の子供たちにとっては、実感を伴いにくいものだったろう。

美談とは、理想的な人間の在り方を、具体的な行為を通して説く話である。そしてそれは、読み手・聞き手の誰もがなぞることのできるものでなければならぬ。常人に真似できないような超人的な行為は、美談には相応しくないのだ。美談の主人公が、平素は没個性であるのもそうした理由によるといえよう。中内敏夫も指摘しているように、突出した個性よりも、群衆に埋没することによって発揮される新たなヒロイズムこそが、美談の主人公の行為に相応しい⁽¹¹⁾。日常の延長線におかれる非日常的行為が美談の要諦なのである。美談的行為をいかに身近に感じさせられるか、その橋渡しをするところが教員の腕の見せ所といえよう。

この問題の解決策の一つが、台湾の教育界で行なわれていた、教材を「地方化」させることである。新莊郡國語研究班の「讀方教授の地方化に關する研究」という論文では「讀方教授の地方化の方法として凡そ二つの部面が考へられる」として見解が

述べられている。⁽¹²⁾

同論文によると、「一は地方から生れた教材をそのまゝ、兒童に提示するものであり、之を地方的方法と呼ぶ」としている。具体的には「郷土讀本（副讀本）を提供するか、郷土かるたを作成させるとか、其地方特有なる教材によつて兒童の一般の陶冶を目圖するもの」とのことである。そして「二は與へられたる教材を地方化郷土化する方法で地方化的方法と呼ぶ」とい、具体的には「國家の要求から與へられたところの教材をその地方の自然及文化と結合して理解を容易ならしめやうとするもの」としている。

そのうえで同論文では「地方化の實際」と題し、「地方の實際生活の上に必要な材料をもつて編纂せる地方的讀本」を作成して授業で副讀本として用いることを薦めている。続けて低学年・中学年・高学年と学年別に三つの要点を述べており、「傳説、地方的偉人」の資料を用いる必要性が述べられており、「具體例として「危篤の妻女を顧みず國勢調査完了」「實父の危篤を秘して出征した警官美談」という話が載せられている。ともに公務員が主人公であり、また、後者の話は霧社事件を題材としているなど、いろいろと興味深い。

山岡栄の美談は、副讀本にこそならなかったものの、教材の地方化によつて語られた話だといえる。この場合の「地方化」は台湾全土というより、もつと地域に密着したものだ。山岡栄の美談は、教室空間では台中州の新社と東勢という小村で

のみ語られたのである。

ただ、山岡栄以外にも、台湾で美談の主人公として語られた殉職教員は他にもいた可能性はある。植民地下の台湾には、殉職した教員を「英霊」として祀る装置があった（ここでは「英霊」という語を比喩的に用いている）。戦死した英霊にとつての靖國神社に相当する施設が、台湾の殉職教員たちにはあった。それは台北の芝山巖神社^{しんがん}である。

日本による植民地統治が始まった翌年の明治二十九年（二八九六）、台北の芝山巖学堂で六人の教員（六氏先生）が抗日ゲリラによつて殺害された。その後、殉職記念碑が建てられ、台湾の教育界では、犠牲になった六人の教員の志を「芝山巖精神」と称して模範とした。奇しくも、山岡栄が亡くなった昭和五年には芝山巖神社が創建されて、台湾教育に殉じた教員を祀るようになった。終戦までの十五年間で、その数は実に三三〇人に及ぶ。毎年二月一日には慰霊祭が行なわれ、その様子は『臺灣教育』紙上に報告されている。

山岡栄も「芝山巖精神」の体現者として祀られることになった。次に『芝山巖史』の「東勢農林補習國民學校助教諭 山岡栄」の項を紹介する。⁽¹³⁾

氏は愛媛縣の人、大正九年十一月同縣の伊豫郡立實業學校本科を卒業し、農會に職を奉じ同地方の農事發達に盡す處あり、昭和四年末渡臺し、昭和五年三月東勢農林補習國

民學校助教諭心得を拜命す。同年五月助教諭に任せらる、この月九日人命救助の爲殉職死去せらる、その爲め臺灣教育會より表彰せらる。

一九四五年、日本政府による植民地支配が終わり、中国国民党が台湾を統治するようになると、芝山巖神社は撤去され、殉職記念碑も倒された。二・二八事件とそれに続く白色テロと戒厳令、そして言論弾圧と徹底した反日教育のもと、日本人にまつわる美談は封印されることになる。山岡栄の美談も例外ではない。先の劉吉平さんと頼運和さんとの会話にも、こんなやりとりがあった。劉さんの発言に「僕が在職中に」とあるのは、新社郷公所（役場）に勤めていた頃という意味。⁽¹⁴⁾

劉「終戦後、もう蒋介石が来ているでしょう？」

頼「（碑が）取り壊されなかったのは幸いだった。あんなところに隠れているから、今まで残っておった。それがもし、その記念碑が町のなかにあつたら……」

劉「うん、本当だ本当だ。そういうことも考えられる。もちろん僕が在職中にね、何べんも考えたよ。これ少し予算を組んで、五月九日に何か記念行事でもやってみようかなって、何べんも考えたよ。ところが時代も時代で、戒厳令でしょう？ そういうこと、やりきれないよ」

国民党統治下の台湾においても、美談は必要とされた。かつて日本政府が台湾人を日本人にしようとしたように、国民党政府も台湾人を中国人にする必要があったのだ。具体的には、孔子や孟子といった古典時代の人物のほか、近代の人物では、国父・孫文や、蔣中正（介石）総統の少年時代の挿話などである。この点については、今後の課題としたい。

四、民主化時代の美談の行方

一九八八年に蔣經國総統が死去し、李登輝が総統に就任すると、台湾の民主化は急速に進んだ。一九九六年、初めての国政選挙で李登輝が総統に再選され、二〇〇〇年には民進党の陳水扁が総統に就任し、国民党が野党になる。この時点で、台湾の民主化は完成したといつてよい。そうした時代のうねりのなかで、日本の植民地時代に対する評価も変わっていった。

民主化期の台湾において、山岡栄の美談はどのように語られたのだろうか。

『新社郷誌』（一九九八年、新社郷）には「勝蹟篇」「人物篇」の二か所に山岡栄に関する記述がある。試みに、「勝蹟篇」の「殉職山岡先生之碑」を紹介すると、まず、山岡先生の人となりを「為人熱心豪爽、親切和藹」と紹介したうえで、五月九日の事件についての解説がなされ、その行為を「義勇」「葬列殉職」と評している。そして「山岡先生は日本人だが、国籍に関係な

く、台湾の学生を救おうとした犠牲の精神は称揚されるべきである。また、記念碑の周辺を環境を整備し、六十八年前のこの壮烈な事績を伝えていくべきである」(原文中国語)と結んでいる。殉職記念碑の写真も載せられていて、記事の内容ともども、国民党時代には考えられなかったことである。

この時期、植民地時代の日本人の美談が復活したり、新たに生成したりしている。例えば、苗栗縣の「日露戦役望樓記念碑」も「台湾光復記念碑」として復興し(一九九八年)、屏東縣には医師・池上一郎博士を記念した「池上文庫」が創設され(二〇〇一年)、嘉義縣には技師・八田與一の墓の脇に「記念堂」が建てられた(二〇〇一年)。芝山巖事件の六氏先生についても、破棄されていた伊藤博文揮毫の殉職記念碑が再建され、士林國民小學(芝山巖学堂の後衛)のOB有志によって「六氏先生之墓」も建立された(一九九五年)。

一連の現象が起こった理由については、一概には言えない。個々の事例の慎重な検討が必要になるが、共通しているのは、植民地時代に国語(日本語)教育を受けた世代の老人たちが、何らかのかたちで影響を及ぼしている事実である。戦前に日本政府の皇民化教育を受け、戦後の国民党政府の恐怖政治を体験していた彼ら彼女らは、概して、好意的に日本統治時代を振り返る。是非はさておき、この世代の台湾人の日本観、日本人の美談復活・生成の背景にあることは疑いない。そして言論の自由が保障されるようになった時期と、彼らがリタイア

し、歴史と自分の人生を回顧する時期とが重なった。

山岡栄の話の場合、先に紹介した頼運和さんがキーパーソンになった。昭和三年(一九二八)生まれの頼さんは、東勢鎮の出身だが、実は山岡栄のことは長らく忘れていた。その頼さんが、なぜ山岡栄の美談普及に取り組むことになったのか。

手元に『山岡先生愛在新社／七七周年追思紀念活動』という冊子がある。二〇〇七年五月九日、山岡栄の七十七年忌に記念式典が催された折に配られたものである。台中縣政府、台中縣政府教育局、台中縣文化局、新社郷公所が主催者に名を連ね、協力に新社高級中学(高級中学)は「高等学校」の意。山岡栄の勤務していた農林国民学校の後衛)、白冷圳社区総体栄造促進会の名があり、協賛には十一もの団体が加わっている。冒頭に置かれた、山岡先生紀念公園管理委員会による「追思紀念活動構想」に、その間の顛末が記されている。

契機になったのは、二〇〇三年、偶々台湾に赴任していた山岡栄の親戚の川船淳彦氏(当時、台湾フアナック勤務)が記念碑を探り出したことである。これにより、久しく忘れられていた山岡栄は俄かに脚光を浴びることになる。同年九月二十六日付け『中國時報』に、「中日師生情縁／搭起兩國友誼橋」「日籍老師捨己救人／塵封故事重新傳誦／促成新社郷和愛媛縣中山町擬締結姊妹士」なる見出しで、山岡栄の事績を大々的に報じ、併せて、写真三葉(山岡栄の写真、十年忌で栄夫人が記念碑を訪れたときの写真、ご息女三人の写真)も載せられている。

地域興しの気運もあった。川船氏が来訪した二〇〇三年に「新故郷社区营造計画」の一環として、山岡栄の碑の周囲を美化し、公園を創ろうという計画も持ち上がった。翌二〇〇四年には、同じく山岡栄の親戚に当たる松井一夫氏が新社を訪問して、記念碑の脇に桜の苗を植樹した。二〇〇五年には、白冷圳社区総体栄造促進会の理事長ら四人が日本愛媛県中山町を訪問して山岡栄の遺族に会い、盛景寺の殉職記念碑を見学した。そのうちの一人が、日本語翻訳担当の頼運和さんだったのである。山岡栄の事績に感服した頼さんは、日本統治時代の美談復活の橋渡し役を買って出たのである。

『山岡先生愛在新社／七七周年追思記念活動』には、当日の式典のタイムテーブルと、山岡栄の事績が綴られている。初めに「歴史沿革」の項を新社高級中学の生徒・曾晏祝さんが書き、その後、台中州知事・水越幸一の碑文の原文と中国語訳と、先に紹介した『中山町誌』の記事の原文と中国語訳が続く。これらの中国語訳を作成したのが頼さんだった。

頼さんは記念式典の運営計画にも参加している。地元の中高生によるプラスチックバンドや小学生による二胡（胡弓）の演奏は学校側の計画だが、小学生の児童が「七里ヶ浜の哀歌」を日本語で歌ったのは頼さんの発案である。頼さんにその意図を伺ったところ、水難事故による犠牲者という点で連想がつながるからとのこと。美談がべつ美談を引き寄せている点に留意したい。当日は頼さんによる「七里ヶ浜の哀歌」の話の解説と歌詞の中

国語訳も配られた。

七十七年忌の記念式典には私も参加した。当初は端のほうで見学しているつもりだったが、日本人は川船氏と私だけだったので、遺族の代わりに引つ張り出され、代表して献花をした。当日はテレビ局や新聞社も取材に来ていて、この日の様子は二〇〇七年五月十日付『自由時報』に「緬懷山岡老師新社學子奏樂曲」として写真入りで紹介されている。ここでもマスメディアが美談生成に関与している点に留意したい。山岡栄の事件の第一報を伝えた『臺灣日日新報』が、すでに事件を「美談」として紹介しているのが思い出される。

山岡栄の美談復活のきっかけ作つたもう一人のキーパーソンが、台中縣議會議員の陳萬通氏である。⁽¹⁵⁾もともと新社郷の郷長（「郷」は「村」、「郷長」は「村長」の意）を務めていた陳氏は、日本語教育にも力を入れていた。山岡栄の記念公園の開発計画も陳氏によるところが大きい。式典に合わせて開かれた討論会（私も出席していた）では、記念碑を整備して観光客を呼び込めないかとも話していた。美談復活の動機の一つとして、リズムの問題が浮上してこよう。

山岡栄の追悼式典はその後毎年開催され、今年（二〇一〇年）で四回目を迎えた。私が参加したのは一回目だけだが、手元に頼さんからいただいた『山岡老師愛在新社／七八周年追思記念活動』（二〇〇八年）という冊子があるので、この年の活動内容は概ね判る。それによれば、殉職記念碑の写生大会など

も行なわれている。参加したのは、新社の小中高生五十四名。優秀作品はパンフレットにも載せられていた。碑という事物が美談語りの契機になつている点に留意したい。

おわりに

これまで見てきたように、山岡栄の美談は、日本統治時代の台湾において生成し、植民地統治が終わり、国民党時代が始まるとともに消滅し（もしくは、潜行し）、民主化時代になって復活した⁽¹⁶⁾。ただし、復活したといっても、今日の山岡栄の美談の語られ方と、植民地時代のそれとは大きく異なる。何が異なるかという点、権力者の関与の有無である。

今日の山岡栄の美談は、日本政府はもろんのこと、個人レベルの日本人の思惑とも無関係なところで復活した。私が紹介するまでは、関係者以外で山岡栄の美談復活の事実を知る日本人はいなかったはずである。むしろ台湾当局とも関係はない。台中縣政府が乗り出したのは、美談復活が軌道に乗った後である。今日の山岡栄の美談は、権力なき美談である。

しかし、権力なき美談といいながら、式典で生徒たちに意味も判らない日本語の歌を歌わせたり、記念碑の絵を描かせたりといった行為に、ある種の権力性が生じているのは認めざるを得ない。それは必ずしも、大人対子供、教員対生徒という立場によつて生ずる権力性というわけではない。美談という形式そ

のものに内包された権力性なのだと思えたほうがよい。

説話には、聞き手の理想的な反応を期待されるジャンルがある。例えば、笑話や怪談、哀話、艶笑譚などがそうである⁽¹⁷⁾。美談もその範疇に入れられるが、聞き手に主人公の行為への共感と、行為の再現を迫るという意味で、前四者（笑話、怪談、哀話、艶笑譚）よりも強制力は強い。美談が持つ権力性とは、話の場を維持するための振る舞いが強要される点にあると思うのだが、それを解明するには、またべつの論考が必要となる。

かくのごとく、時代に翻弄されつづけてきた山岡栄の美談だが、説話史上の評価とはべつにして、子どもを助けようとして自らの命を落とした氏の行動が色褪せることは決してないと思いき添えておく。

註

(1) 重信幸彦「銃後の美談から―総力戦下の「世間」話序説―」

『口承文藝研究』一三三号 二〇〇〇年

重信幸彦「美談」のゆくえ―宮古島「久松五勇士」を巡る「話」の民族誌―『民族学研究』六五巻四号

二〇〇一年

(2) 二〇〇七年四月二十三日調査。傅茂金さん宅にて。お話は日本語で伺った（以下同）。

(3) 山岡栄の十周忌記念式典については、小林廣三郎「殉職山岡助教諭十年祭参列記」（『臺中州教育』七巻五号、

- 一九三九年、台中州教育会) に詳細が載せられている。
- (4) 二〇〇七年四月二十三日調査。張秋貴さん宅にて。
- (5) 二〇〇七年五月八日調査。劉吉平さん宅にて。
- (6) 『中山町誌』一九六五年、中山町
- (7) 二〇〇八年四月一日調査。山岡町子さん宅にて。
- (8) 美談「君が代少年」の顛末については、村上政彦『君が代少年を探して』(二〇〇二年、平凡社) 参照。
- (9) 霧社事件に関する研究書は多いが、ここでは左記二冊を記す。
- 中川浩一・和歌森民男編著『霧社事件―台湾高砂族の蜂起―』一九八〇年、三省堂
- 邱若龍著、江淑秀・柳本通彦訳『霧社事件―台湾原住民、日本軍への魂の戦い―』一九九三年、現代書館
- (10) 呉鳳は清朝期の役人で、自らの命を犠牲にして原住民の「出草(首狩り)」の習俗を止めさせたというが、実在は覚束ない。呉鳳については、左記論文を参照。
- 下村作次郎『呉鳳』関連資料集』一、二巻(二〇〇七年、緑蔭書房) に詳しい。
- 駒込武「植民地教育と異文化認識―「呉鳳伝説」の変容過程―」『思想』八〇二号、一九九一
- (11) 中内敏夫『軍国美談と教科書』一九八八年、岩波書店
- (12) 新莊郡國語研究班「讀方教授の地方化に関する研究」『國語教育の諸問題』一九三二

(13) 『芝山巖史』一九三二年、台湾総督府

(14) 註(5) に同じ。

(15) 先に紹介した『新社郷誌』が編纂されたときの郷長(村長)が陳萬通氏である。

(16) なお、二〇〇八年に国民党が政権政党に復活して以来、『新社郷ホームページ』(二〇〇七年閲覧) にあった山岡栄の記事が削除されている。

(17) 口承文芸研究史における「怪談」というジャンルの扱い方については、高木史人「怪談の階段」(『学校の怪談』はささやく) 二〇〇五年、青弓社) 参照。敷衍させれば、関敬吾『日本昔話集成』ならびに『日本昔話大成』以来の昔話分類にある「笑話」の位置付けの問題とも関わる。

(いとう・りょうへい／台湾・南台科技大学)

〔追記〕

本稿脱稿後の九月二十四日、山岡栄の美談復活のキーパーソンとなった頼運和さんが亡くなった。謹んでご冥福をお祈りするとともに、碑の行方を見守っていききたい。